

はじめに

この提言集は、発達障害の中でも、自閉・ADHDの成人当事者がモニターとなって、学校教育において必要な支援を考えていこうとする試みです。この試みは、他の障害の分野においては古くから行われていたのですが、発達障害の分野では、最近まではあまり行われていませんでした。それが、今回こうして実現したことで、「古くて新しいアプローチ」だと言えらると思います。

発達障害においては、本人からの提言を得ることがなかなか容易ではありません。なぜならば、障害自体が当事者本人の障害理解や自覚を妨げてしまうことがあり、仮に、自覚できる状態にあったとしても、本人が障害を認めていなければ当事者モニターになってもらうことはできないからです。さらに障害について語るためにはそれなりの言語能力が必要とされます。そして、これらの問題をクリアし自らの障害について語るができる当事者がいたとしても、脳機能の障害と考えられているために、その判断力が疑われてしまうことも残念ながらありました。

これらの事情によって、発達障害支援では当事者モニターを活用する試みが、他の分野に比べて遅れていたことは否めません。しかし昨年あたりから、当事者の声を載せた提言集や書籍は次第に増えてきているようで、あらたな時代の鼓動を感じずにはられません。

当事者モニターになることを快諾してくれた自閉・ADHD当事者に多数恵まれたこともあり、本提言集は発表されることになりました。もちろん、この提言集を読んだからと言って、教育現場で発生している自閉・ADHD児の問題が全て解決するわけではありません。同じ当事者だからという理由で全ての問題について解決策が提示できるというほど問題は簡単ではありませんし、私たちも楽観しておりません。ここに掲載しているのは、あくまでこの企画に参加した当事者モニターが提示する解釈・アイデアであり、さまざまな創意工夫のうちの一つと考えていただければ幸いです。

なお、本提言集は、発達障害に対する専門的な知識がなければ実施できないような技術をたくさん掲載するのではなく、教育関係者ならば誰でも応用できる工夫を提示することを念頭にすえて作成されました。これらの方策をはじめ、よいと思われるさまざまな方法でアプローチして、より多くの教育現場で改善がはかられていくことを期待してやみません。

平成15年11月

高森 明

(発達障害相互支援ネットワーク)